かゑらじと　かねて思へハ　梓弓
なき数に入る　名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信　第 18 号
平成 27 年 10 月 13 日
発行＝四條畷楠正行の会
〒575-0021　四條畷市南野 5 丁目 2 番 16 号
四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

二つの楠正行墓に登場する黙庵禅師

宝筐院（京都嵯峨野）と往生院（東大阪）

夢窓疎石の高弟であった黙庵禅師

８月例会を休会しましたので､2 か月ぶりの９月例会となり、久々の対面にお互いの元気な姿での再会の喜びと改めて勉強といった緊張感を感じる例会となりました。

例会のテーマは、「正行と黙庵禅師」です。

黙庵禅師についての文献はほとんど見当たらず、ネットでも、京都嵯峨野の宝筐院、東大阪六万寺の往生院、この二つの寺院の公式ホームページにアップされている内容をもとにした情報が大半です。また、楠一族を取り上げた小説や出版本には、たびたび出てきます。

黙庵禅師を巡る人的ネットワークをまとめてみると、以下のようになるのではないでしょうか。

黙庵周諭禅師は、夢窓疎石の高弟とされています。

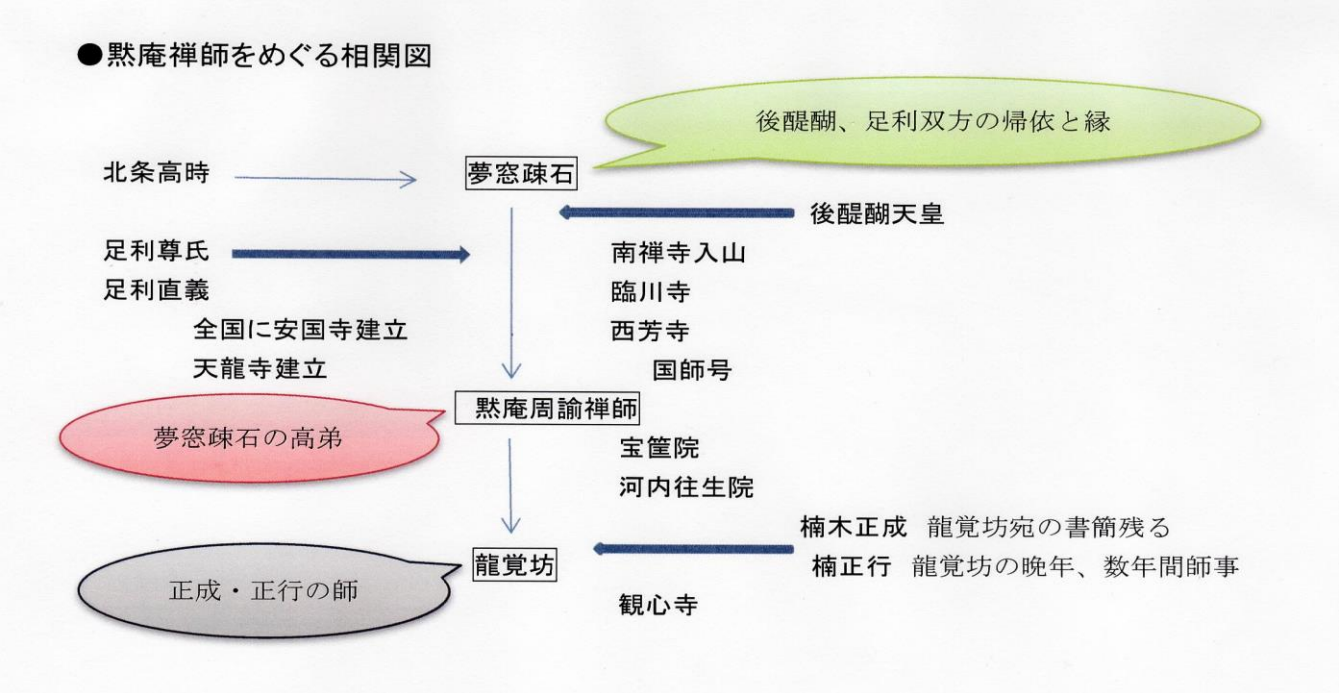
この夢窓疎石は、後醍醐天皇に請われて南禅寺に入山し、また臨川寺や西芳寺を開き、国師号を授与されるなど、後醍醐天皇とは非常に近しい関係にありました。

後醍醐天皇没後、足利尊氏の帰依を受け、全国に安国寺の建立を進め、後醍醐天皇の霊を弔うためにと足利尊氏に天竜寺の建立を進め、長い年月をかけて成功させます。

正行、龍覚坊を通じ黙庵禅師、夢窓疎石と

このように、夢窓疎石は南朝にも北朝にも通じていた高僧でした。その高弟が黙庵禅師であったわけです。

その黙庵禅師は、嵯峨野の善入寺に入山し、衰退していた同寺を復興させます。その後、足利二代将軍義詮の帰依を受け､伽藍整備に力を入れるとともに､義詮没後、八代将軍義政の代になって、義詮の院号宝筐院にちなみ



寺名を宝篋院と改めました。

そして、この黙庵禅師は河内往生院を通じて観心寺の龍覚坊との接触があったと思われます。

正行は、師の龍覚坊を通じて、黙庵禅師、夢窓礎石とのパイプを持ち、結果として、足利尊氏との接触も可能であったのではないかと思われます。

また、足利尊氏に連なる北朝方の様々な情報、武将の動き等を入手できる手立てともなっていたと推測されます。

右・楠木正行首塚
左・足利義詮墓

● 小楠公首塚由来―宝篋院 ●

四條畷の合戦の折、楠正行から後事を託されていた黙庵禅師は、高師直率いる北朝の大軍と戦って討ち死にした正行の首級を善入寺に葬ったと伝わっています。

この話を黙庵禅師から聞いた足利義詮は、正行の人柄をほめたたえ、自分もその傍らに葬るように頼んだといわれています。

ですから、現在、善入寺改め宝篋院には、石の柵に囲まれて二基の石塔が立ち並び、五輪塔は楠正行の首塚、三層石塔は足利義詮の墓と伝えられています。

墓前の石灯篭の書は富岡鉄斎の揮毫。向かって右側、「精忠」は最も優れた忠の意で、左側の「碎（さい）徳」は一片の徳、敵将を褒め称えその傍らに自分の骨を埋めさせたのは徳のある行いだが、義詮の徳全体から見ればその小片に過ぎず、義詮の徳の大きさを褒めた言葉。

宝篋院の書院から本堂周辺は白砂・青苔と多くの楓や四季折々の花木からなる回遊式の庭園が広がり、晩秋から初冬には見事な紅葉を見せ、訪れる人が絶えません。

● 正行公墓由来―河内往生院 ●

楠正行は、四條畷の合戦で、吉野から出陣し、幼少期を過ごした往生院に本陣を構えて、高師直軍に戦いを挑みますが、多勢に無勢、刀折れ、矢つきて敗れます。

正行の遺骸（胴）は、黙庵禅師によって往生院の境内に葬られたと伝わっており、現在、その墓は往生院西南の境内にあります。

二基の石塔があり、左の五輪塔は正行墓、右の石塔は正成の供養塔で、この供養塔は正成300年祭の折建立されたものです。

なお、往生院のホームページ等では、四條畷の合戦は「四條縄手の合戦」と表記しています。同寺院では、河内四条で四條畷の合戦が行われたとの立場をとっておられます。

（写真＝宝篋院の二基の石塔・史跡小楠公御墓は、それぞれ宝篋院・河内往生院のリーフレットより転載。黙庵禅師をめぐる相関図は扇谷作成。

本文文責は、「四條畷楠正行の会」代表　扇谷昭）